

デートの原則、結婚、性

島先克臣

目次

I 初めに	1
II 世界観・人間観（神の像に）	1
A 進化論的世界観、人間観	1
B 聖書的世界観	1
C 聖書的人間観	1
D 人間の使命	2
E 文化命令と宣教命令	3
III 異性、結婚、性	3
A 異性観（男と女とに）	3
B 結婚観	4
C 結婚と性	5
IV デートの原則	8
A 恋する心	8
B デート	8
C デートの原則	9
D その他	10
V 結婚に向けて	11
A 伴侶選択の基準	11
B 「み心の人」について	11
C 婚約中の交際における注意	12
VI その他	12
A 過去の傷のいやし	12
B オナニーについて	12
C 墮胎に関して	12
VII 最後に	13

I 初めに

私たち人間を愛を込めて造られた神様は、私たちが最も人間らしくまた幸せに生きる道を聖書を通して示して下さいます。創造本来の人間のあり方を目指すキリスト者の生き方は、他の人と違う面があって当然ですし、より幸いな歩みが出るはずで。ところが、私達はいつのまにか聖書を知らない人々と同じ見方、考え方、やり方の影響を受けてしまっていないでしょうか。

デートや結婚、また性という分野においても同じことが言えます。この大切なテーマについて聖書は何と言っているのか、聖書を開いて、共に考えてみましょう。そのためには先ず世界、また人間とは何なのかという土台から始めましょう。

II 世界観・人間観

私達を囲む目に見える世界、また私たち人間とは一体何者なのでしょう。私達は、世界と自分をどのように見ているのでしょうか。

A 進化論的世界観、人間観

進化論に立つならば、世界は全く偶然にできた「物」でしかありません。宇宙は原因結果だけで動いている機械となります。

人間はアメーバから、偶然の積み重ねの結果進化してきた分子の集まりでしかありません。基本的には、単なる「物」、機械と同じです。絶対の価値とか道徳とかいうものはあり得ません。すると、能力と快感が人間を量る基準になります。偏差値、学歴、実績、能力のある人は価値があり、ない人は価値がないということになります。すると、自分より能力のある人を見るとねたんだり劣等感を持つことになります。逆に自分より能力のない人を見ると優越感を持ってしまいます。ヒトラーはこの考え方を徹底した人で、何も生産せず社会の重荷になる老人や、なおる見込のない病人を殺していきました。ユダヤ人を劣等民族として虐殺していったのは、同じ考え方からです。

また、進化論的世界観に立つならば、私たちは、回りにある自然を、自分の都合のいいように利用

できる単なる物と見るようになり、結果的に環境を破壊することになります。

B 聖書的世界観

世界は、また人間は、本当に単なる「物」なのでしょう。聖書は何と言っているのでしょうか。

創世記一章によれば、全ては神様が知性と芸術的センスを駆使し、心を込めて造って下さったものです。庭の花も、小鳥も、神様の愛の作品です。しかも、神様が万有引力の法則や、体内の酵素の働き、また壮大なエコ・システムを保つことにより、一瞬一瞬支えて下さっているものです。目に見える物で、神様と何の関わりもなく、ただそれだけで成り立っている「物」は何一つありません。神様が一瞬一瞬愛し、かつ支えて下さっているのが、被造世界なのです。目の前の一輪の花、また一匹の子犬、また林や石などを考えてみて下さい。

1. それらは、自然にできて、自分で存在して、神様と何の関わりもない「物」なのか、
2. それともそれらは神様が心を込めて造り、今も愛し、一瞬一瞬支え、神様との関わりの中で存在している「被造世界の一員」なのか、

この二種類の見方の違いは、「天と地」、「白と黒」程の差があります。そして、この世界観の違いによって人の人生は、全く違ったものになっていきます。皆さんは、世界をどう見えていますか？もし聖書を神の言葉と信じるならば、自分の見方を聖書の真理に近づけ始めていただきたいのです。先ず身の回りの花や小動物から始めて下さい。

C 聖書的人間観

他の被造物同様、人間も神によって心を込めて造られ、愛され、一瞬一瞬支えていただいています。しかし、それだけではありません。被造世界の中で人間は特別な存在です。私たち人間だけが神に似せて造られているからです(創世記1章26節27節)。ではどんな点で私達は神様に似ているのでしょうか。

創世記1章全体の中には、神が何をした、という文章がたくさんあります。それを注目しますと、

神様がどのような方が分かって来ますし、私達人間がどの様な被造物かも理解できます。

1 節「創造した」

無から美しい自然を造られた神様は、創造性が豊かな方であることが分かります。神様はアーティストだと言った方がいます。花や鳥の色の美しさに触れる時、神様の創造性の豊さと美的センスのすばらしさを思います。私達はこの神様に似せて造られたので、地上で美を求め、それを表現しようとするのです。

3 節「仰せられた」

神様は言葉を持っておられます。そして地上では人間だけが言葉を持っています。イルカが色々な信号を出しあっているようですが、人間のように言葉を使って気持ちを表し、考えを深め、それを伝えて社会を動かすということは出来ません。また人間だけが言葉を使って神と語り合う事が出来ず。

4 節「よしと見られた」

神様には善悪の基準があります。それ故、人間にも善悪の基準があります。ですから、他の人への愛の故に、また正義のために犠牲を払う人の話を聞くと感動するのです。誰も見ていなくても、悪いことをする時、良心が痛むのです。もちろんこの善悪の基準や良心は、神様から離れてしまったので、大分歪んでしまいました。

4 節「区別された」

古典論理学の出発点は「Aは非Aではない」という、区別することにあるそうです。神様は論理的なお方、優れた知性を持っておられるお方です。私達の耳は、どんな楽器より遥かに優れていますし、私達の脳はどんなスーパーコンピューターより遥かに優れています。私達を設計し造られた神様は私達が想像できないような知性を持っておられます。私達人間は、神様とは比較はできませんが、神に似せて造られたので、科学を進展させ、思想を深めて来られたのです。

5 節「名付けた」、1 6 節「司らせる」

名付けるとか、司らせるとかというのは、権威ある

ひとのすることです。神に権威があるように、私達も他の被造物に対して、権威が与えられました。(創世記 1 : 2 8)

2 2 節「祝福する」、2 9 節「食物として与えた」

祝福と言う言葉は、相手の幸いを願う思いでしょう。神様は私達人間、また他の動物の幸いを願っておられる方です。また、神様は私達や他の動物を造っておいて放り出したのではなく、食べ物を用意してくださいました。神様は私達の幸いを願い、必要に応える愛の方です。私達もこの方に似せて造られているので、人間や動植物の幸いを願いその必要に応えようとします。

D 人間の使命

さて、創世記一章から、私たち人間が神様の能力や資質に似たものが与えられている事を知りました。これは、他の被造物には与えられていないものです。では、これらのすばらしい資質、能力は何のために与えられているのでしょうか。

高学歴を得、高収入を得るためですか。プライドを満足させるためですか。新製品を買うためでしょうか。いえ違います。神様は神に似せて造った人間にしか出来ないことを、使命として私達に委ねられました。それが創世記 1 章 2 8 節の命令です。「生めよ、増えよ、地を満たせ。地を従えよ、支配せよ。」

この命令を読むと、何故神様が天地を造り、人間を造られたのか、何をその時願ったのかが分かります。神様が願ったのは、人間の共同体が世界に満ちることでした。もちろんそれは、偶像礼拝、憎しみ、戦争、環境破壊に満ちた共同体ではありません。それは、罪の結果です。神を愛し、愛と正義に満ち、被造世界を愛情深く正しく治める共同体です。そのような共同体が全地に満ちること、それが、神の天地創造の目的でした。罪を犯す前のアダムとエバは正にその様な共同体でした。心を合わせて神を愛し、互いに愛し合い、委ねられたエデンの園を、頭を使い、心を込めて耕し守ったのです(創世記 2 : 1 5)。アダム以降、職業

は多様化しました。確かに罪の故にゆがんでいる面が多々あります。しかし、私たちの今の仕事や生き方もこの命令の延長なのです。神を愛し、愛と正義に満ち、被造世界を愛情深く正しく治めるという使命を、自分では意識していなくても、職場と家庭の歩みを通して全うしようとしているのです。この命令を「文化命令」と呼ぶ人もいます。それは、この命令が私たちの生活全ての分野（科学、建築、芸術、文学、経済機構、家庭形成、等）に関わり、それは、一つの文化として現れてくるからだと思います。

アダムとエバの耕していた土地は大した広さではなかったでしょう。しかし、アダムは「神様に地球を任されているんだ」という意気に燃えて鋤を振るっていたと思います。私達が具体的に出来ることは小さいかもしれませんが、しかし、アダムのような意識で生活することは可能です。その時、目標が見えてきます。夢が生まれます。今の勉強と仕事に張りが出て来るのです。子供が小さい時から、このすばらしい使命を分かち合い、語り合っていくのは、楽しいものです。

E 文化命令と宣教命令

さて創世記2章の終りまでは、この「文化命令」が、人間に与えられた唯一最大の使命でした。しかし、最初の人類が神に逆らい、墮落し、神から離れた自己中心な歩みをするようになってからは、使命がもう一つ増えました。それは、マタイ28：18-20の「宣教命令」です。しかし、これは、第一の使命と別のものが与えられたものではありません。宣教命令の真の目的は、神から離れた人類をもう一度神の元に連れ帰り、本来の人間の在り方、この文化命令を守れる姿、に回復させることなのです。そして、キリストの再臨の時、人類と全被造世界は、創造本来のあり方に沿って完成します。宣教命令の目的を誤解してはなりません。キリストの福音は、創造の秩序を回復させ完成するためにあるのです。¹

¹ 拙論、終末の今を生きる：千年王国説の違いを超えて、創造の回復シリーズ、no. 1 (久喜: 2000)参照。

III 異性、結婚、性

次に異性について聖書から考えてみましょう。

A 異性観（男と女とに）

私達は、自分の性を、異性を、また伴侶をどう見ているでしょうか。

1 女性は人間以下？

古代の多くの社会では、人間とは男のことであって、奴隷や女性は人間以下でした。キリスト教の影響で女性に対する見方が少しずつ改善して来てはいても、日本では現代でもある人々にとって女性は「畑」です。つまり、「家」に嫁いできた女性は「家」のために子供を生み、育ててこそ価値があるのであって、不妊の女性は追い出されるか肩身の狭い思いをするのです。私たちの身の回りでも、女性・妻・母親は、男・夫・子供に愛され尊ばれ感謝され守られていると言うよりも、利用されていることが多いのではないのでしょうか。また、女性は時代を越えて今にいたるまで「性的商品」とされています。

2 男と女とに

聖書は何と言っているでしょう。創世記1章27節は、3行の韻をふんだ詩ですが、強調点が少しずつ違っています。一行目は神が人を造られたこと、二行目は人が神の像に造られたこと、三行目は人が男と女とに造られたことです。ここで、女が男と同じように神の像に造られたことがはっきり分かりますし、それだけでなく、人類と言うものが男と女からできている、つまり、女性なくしては人類が人類でありえない、とまで言っているのです。

3 助け手

創世記2章の「助け手」という言葉も女性の貴さを証ししている言葉です。「人が一人であるのは良くない。私は彼のために、ふさわしい助け手を造ろう。」と神様は仰いました（2：18）。

旧約聖書の中の「助け手」という言葉を調べると興味深い事が分かります。イスラエルの民が敵に襲われて負けそうなとき、助けに駆けつけ勝利に導く頼りになる助っ手が「助け手」と言われて

いるのです。多くの場合、神ご自身を指します。

「助け手」とは、あってもなくてもいいが、あった方が助かるというものでなく、杖や電気製品のように人格のない「物」でもなく、また男性の目標達成のための手段でもありません。

女性の尊さは創世記2章でより強調されています。神様がアダムの元にあらゆる動物を連れて来ましたが、その中にはアダムにふさわしい「助け手」は見あたりませんでした(2:19、20)。

動物達は、神が愛し、支え、命を与え続けている、神の目に尊い存在であることを思い出しましょう。私たちと心を通じ合わせることもできます。詩篇148篇では共に造り主を崇める存在と描かれています。また大地を共有し助け合って生きている仲間でもあります。しかし、それ程大切な動物達のうちにさえアダムの助け手がいなかった、という事実は、後に現れる女性の尊さを強烈に訴えているのです。

4 エバ現る

そこでエバが現れたました(2:21、22)。するとアダムは「これこそ、今や(ついに)私の骨からの骨、肉からの肉」と、現代の私たちにはロマンチックとは思えませんが、人類史上、初の恋愛歌を歌ったのでした。女性が低く見られていた古代社会の中で、聖書だけが女性の本当の姿を示していました。大切な仲間である動物と比較できない、神秘的とも言える程の一体感(同族感)を共有できる存在なのです。

女性は男性と共に、神の像に造られた尊厳ある存在です。しかも最初から男と違うものとして造られました。それは互いが補い合うためなのです。男と女は、肉体的に違います。精神的にも違う面があります。「男女は人間として同等であるだけでなく、同質だ」と、ある人々は言っています。それは事実と反しますし、聖書の教えとも矛盾します。確かに男女は神の御前に人間として同等ですが、同質ではありません。違いがあるのです。その様に造られたのです。それは、互いに競争したり、相手をばかにしたり利用したり、また自分

を卑下したりするためではありません。互いの違いを感謝し、認め合い、助け合い、補い合うためなのです。

5 私達は

私達はどうでしょう。罪の結果、私たちは、被造世界、動物達、そして女性を低く見るようになってしまいました。私たちは、職場、家庭、学校で、異性を低く見たり利用するのではなく、神の像に造られたもの同志の人格的な交わりを深めていきたいですし、また、互いの違いをもって、創造秩序の回復のために助け合って行きたいものです。

B 結婚観

以上異性について考えてきました。次に結婚について考えてみましょう。

1 人間が作った制度?

「結婚とは、人間が便宜上作ったもの」とか、「一夫一婦制は雑婚から進化したもの」という考え方があります。果してそうでしょうか。創世記2章24節を見てください。神は最初から男と女を造られただけでなく、最初から結婚という制度も定めておられたのです。人間が考え出したものではないのです。

2 愛し合っている間だけ?

「結婚とは男女が愛し合っている間だけ共に生活すること」というのが現代の人々の考え方の主流のように思われます。しかし、創世記2章24節を読んで下さい。ここの「一体」と言う言葉は、「夫婦はもはや二人別々でなく、一つの身体になった、だからもし無理やり引き裂けば死んでしまう」というニュアンスを含む、強い言葉です。イエスははこの24節を引用してこう言われました。「それで、もはや二人ではなく、一人なのです。こうゆうわけで、神が結び合わせたものを引き離してはなりません」(マタイ19:4-6)。パウロはやはりこの2章24節を引用し「この奥義は偉大です。私はキリストと教会とをさして言っているのです」(エペソ5:31、32)とさえ言いました。

結婚というものは人間から出たものではありません。

ません。神が最初から定められていた聖なる制度です。ただ二人が同じ屋根の下で生活するというものでなく、目には見えませんが、「一体」となることです。その「一体」であると言うことは、教会がキリストの体であることを表現するほどに神秘的な関係なのです。神が初めから定め、ご自身が貴び（マラキ2：14-16）、神秘的ともいえる結婚というものを、私達は決して軽く見ではいけないと思います。

3 結婚は契約

結婚は契約だと聖書は言っています。ある人々は契約と聞くと、人間の一時的な単なる約束にすぎない軽いものというイメージを持ってしまいかもしれません。しかし、決して約束を破らずに必ず言葉通りに行動する神様にとって、契約とは絶対的な重さを持ちます。

先ずエゼキエル書16章7、8節を見てみましょう。これは、男女の愛と結婚を例えに使って、神様がいかにイスラエルの民を愛したかが述べられている箇所です。ここを見ますと当時結婚というものがどのように考えられていたかが分かります。8節の最後にこうあります。「私はあなたに誓って、あなたと契を結んだ。．．．そして、あなたはわたしのものとなった。」すなわち、誓うことによって契約が結ばれ、その結果女性が男性のものになる、ということです。実際神様は、出エジプトの後、シナイ山でイスラエルの民に誓って契約を結ばれました。神様の側では決してその契約を破らずその契約に忠実であったことが旧約聖書を通して証しされています。

ところでキリスト教式の結婚式は今でもこの順序です。互いが神の前に誓いをすることによって契約を結ぶ、そのことによって二人は一体となる、そして牧師が二人を会衆に向かわせ、「父と、子と、聖霊のみ名において、この男女が夫婦であることを宣言します」と言います。二人が夫婦となる、一体となるのは、結婚式の後の性の営みによるのではなく、式において誓うことによる、ということに注目してください。

マラキ2章14-16節はどうでしょう。4節の最後に「あなたの契約の妻」という表現が出てきます。離婚とは妻を裏切ることであり、契約を破ることだということです。しかも、神様は「あなたとあなたの若い時の妻との証人」とも仰っています。神様は結婚式の誓いを、契約締結を聞いておられる証人なのです。

箴言2章17節では、女性の側の裏切り行為が書いてあります。「彼女は若い頃の連れ合いを捨て、その神との契約を忘れていた。」と。神様は男女が結婚の契約を結ぶ時の証人であるだけでなく、実は、結婚とは神への誓い、神との約束、神ご自身との契約でもあるのだと言うのです。

結婚とは男女当事者同志の契約であり、また神との契約でもあります。その契約によって二人は夫婦となる、一体となるのです。

以上結婚という契約の重さを見てきました。ただ、結婚という契約は永遠不変ではなく、伴侶の不貞や、伴侶としての責任の放棄によって、神の前に解消し得ることも覚えておきましょう。このことは、不貞と責任放棄がいかに破壊的で大きい罪であるかを示しています。

C 結婚と性

次に、結婚と性について聖書から学んでみましょう。

1 性は汚れたもの？

ある人々は、性、セックス、性交渉、と聞くと、いやらしい、不潔、汚れている、と言ったイメージを持っています。それは正しい感じ方でしょうか。

もし、性的な交わりが汚れているなら、神様は人間を男と女とは造られなかったでしょう。まして、アダムとエバに「生めよ。ふえよ」とお命じにならなかったでしょう。男女の性の違いも、夫婦の性の交わりも、神様のご計画し、神様が造られたものなのです。

箴言5章、18、19節にはこうあります。「あなたの泉を祝福されたものとし、あなたの若い時の妻と喜び楽しめ。愛らしい雌鹿、いとしい

かもしかよ。その乳房がいつもあなたを酔わせ、いつも彼女の愛に夢中になれ。」性生活の喜びは神様からのプレゼントです。そのプレゼントをいつまでも感謝を持って楽しみ続けることが、命じられてさえいるのです。

旧約聖書の雅歌という書は、ユダヤの社会で未成年者には読むことが許されていなかった時があった程、夫婦の愛をエロティックな表現で歌いあげています。

夫婦の間の性は、神が初めから計画され、神が祝福されているもの、その喜びと楽しみは、神の賜物なのです。

2 結婚と性は別のもの？

愛し合っていればいい？

ここで注意しなければならない重要な点があります。祝福、喜びである性生活は、夫婦の間に限られているという点です。

現代では結婚と性を分けて考えるのが一般的です。つまり、「セックスパートナーはいるけど、その人とは結婚するつもりはない、もっと収入のある人と結婚する」といった在り方です。また、愛し合っていれば、結婚してなくても性交渉してもよい、と言うのが一般的な考え方です。聖書は何と言っているでしょう。この点で明解です。

第一コリント6章15-20節でパウロは、コリント教会のクリスチャンが売春婦の所に行かないよう勧めています。その中で、「遊女と交われば、一つからだになることを知らないのですか。『二人の者は一心同体となる。』と言われているからです。」とあります。性交渉が結婚と表裏一体であることが言われています。

次の章の3節から5節では、この点がよりはっきりしてきます。ここは夫婦の性生活がテーマです。伴侶が性的な交わりを求めて来ているのにそれを拒む、という事態に対しての教えです。特に4節では「妻は自分の体に関する権利を持ってはおらず、それは夫のものです。同様に夫も自分の体に関する権利を持ってはおらず、それは妻のものです」とあります。つまり、伴侶が求めてきた

ら、断ってはならない、なぜなら、自分の体は伴侶のものだから、と言うのです。

いつから、自分の体が伴侶のものに、また伴侶の体が、自分のものになったのでしょうか？それは、結婚式での契約締結の時です。その時の契約には、「男性の体は、その女性だけのものとなり、その女性の体は相手の男性だけのものとなる」という内容が含まれているのです。この契約が結ばれたので、初夜での性的な交わりが合法的なものとなるのです。

婚約者同志であっても結婚式の直前まで、未だ契約を交わしていません。ですから、相手の体は自分のものではありません。ですから、婚前交渉は非合法です。もちろん、売春婦との性交渉も同じ理由で非合法です。これを聖書では「不品行」と呼んでいます。結婚した人の場合はどうでしょう。伴侶以外の異性の体は自分のものではありません。また、自分の体は伴侶だけのものです。ですから、伴侶以外の異性との性交渉も非合法です。契約違反です。これを聖書は不倫ではなく「姦淫」と呼んでいます。性的な交わりは、結婚式において契約を結んだ夫と妻の間だけに許されているものです。それ以外の性は、不品行、姦淫と呼ばれ、罪なのです。私はこの二つ、不品行と姦淫を合わせて「婚外交渉」と呼んでいます。

非合法的な婚外交渉は不品行と姦淫だけではありません。レビ記18章には出エジプト当時カナンで横行していた性的な罪のリストがあります。そこには、近親相姦、獣姦、同性愛、などが加えられています。カナン人の家庭はこれらの性的な罪の故に引き裂かれ、国家は亡びて行きました。歴史を振り返りますと、婚外交渉は家庭を破壊し、国を滅ぼしていったことが分かります。それ程、婚外交渉は破壊的なのです。それは、神様の創造本来のあり方、創造の秩序に反しているからです。

3 結婚の神聖さ

結婚というものは、人類創造の時から神が定め、造られた神聖なものです。また結婚によって一つとなった夫婦が家庭の要（かなめ）であり、家庭

は社会や国家の土台です。家庭は教会の基盤でもあります。その意味で、結婚が社会を支えていると言えるでしょう。それだけではありません。結婚は、神とイスラエルの関係を表現するのに使われる程深い意味を持っています。教会がイエス・キリストの体である、ということ伝えるのに使われるほど神秘的で神聖なものなのです。

ですから、神様はなんとしてもこの結婚と言うものを守ろうとされます。婚外交渉（不品行や姦淫、等）は、結婚を根底から破壊する行いです。伴侶が婚外交渉した場合は、離婚が成立するほどです。ですから、十戒で「姦淫してはならない。」とあるのです。旧約聖書の時代は、姦淫したものはすぐ死刑でした（レビ 20：10、申命記 22：22）。

新約聖書では、不品行や姦淫を犯して悔い改めない者を教会の交わりから絶たなければならぬとあり（I コリ 5：11）、救いにもあずかれないとさえ言っています（同 6：9－10）。同性愛も同様です（ロマ 1:26、27）。悔い改めれば別ですが（マタイ 18：15－17）、そうでなければ、断固とした処置を取ることが求められています。そうしなければ、教会全体が次第に墮落していくでしょう。

第一テサロニケ 4 章 2－8 節を開いて読んでみて下さい。当時のローマ社会は今の日本と同じように性的に墮落していました。パウロは以前からテサロニケのクリスチャンに対して、夫婦以外の性は罪であり、汚れであると言い、それだけでなく、神の裁きがあるという恐るべき事実を伝えて、自分達を聖く保つよう厳しく警告していました。しかし、世の力は強く、教会の中にはまだ聞き従おうとしないクリスチャンがいたのです。ですからパウロはこの手紙の中でこの点をもう一度取り上げて確認し、「このことを拒む者は、人（パウロ）を拒むのではなく、あなた方に聖霊をお与えになる、神を拒むのです」と述べました。

へブル 1 3 章 4 節は、今まで見てきたことを要約しています。「結婚が全ての人に尊ばれるよう

にしなさい。寝床を汚してはいけません。なぜなら、神は不品行な者と姦淫を行う者とをさばかれるからです。」婚前交渉、浮気、不倫、離婚という一見別々の事柄は、実は結婚を尊んでないと言う点で共通しています。結婚の尊さをもう一度心に刻みましょう。

今まで述べてきたことを短くまとめてみましょう。性という行為が、夫婦の間では神の祝福、賜物、楽しみであるのに、全く同じ行為が夫婦以外でなされた時、それは、夫婦、家庭、社会を破壊し、神の裁きを免れない恐るべき罪となるのです。

4 では私達はどの様に？

では、私たちはどのように生きていったらよいでしょう。

過去に婚外交渉の罪（不品行や姦淫）を犯した人がいるでしょうか。その人は、神様に罪として告白し、赦しを求めて下さい。神様はイエス様の十字架の血潮によってその罪を赦し、あなたを雪のように白くして下さいます（I ヨハネ 1：9、詩篇 32、56 篇）。伴侶に結婚以前の過去の性関係を伝えるべきかどうかは、ケースバイケースでしょう。

現在、婚外交渉の罪を犯している人がいるでしょうか。既婚者も未婚者も即刻悔い改めて下さい。もしあなたが未婚の男女だったら、年齢や生活力等のことがあるので一概には言えませんが、基本的には早く結婚式を挙げるべきでしょう（申命記 22：28 前後を参照）。牧師先生に相談して下さい。

未だ罪を犯してはいないけれども危ない人がいるかも知れません！！その人は「主を恐れて、悪から離れよ。」（箴言 3：7）のみ言葉に従って下さい。ルターは、鳥が頭にとまるのは避けられないが、頭に巣を作るのは避けられる、と言ったそうです。誘惑を受けるのは避けられないが、罪を犯すまでほっておくな、ということでしょう。「下品な冗談を避け」（エペソ 5：4）、ポルノ等の挑発的なものから目をそらし、情欲を

いだいたらすぐ心の中で神様に告白し、赦しを乞う、といった、最初の一步が大切です。

既婚者は、伴侶を尊敬し、愛し、語り合い、また性生活を楽しむということが最大の防御策でしょう（箴言 5：18、19）。伴侶以外の異性に心ひかれないうに意識して注意するのはもちろんです。

また「敬虔の鍛錬」（Iテモテ4：7、8）とありますが、飲食、買物、等、日常生活の中で自分を律する訓練も役立つでしょう。子供の時に、好きな物を好きなだけ食べ、好きな遊びを好きなようにし、好きなものを好きなだけ買ってもらったならば、大人になって性的なことで我慢するのは本当に難しくなります。親は子供の将来も考えて躰をしていきたいものです（箴言 22：15）。

また親は子供が小さいときから、夫婦の性への祝福と婚外交渉の罪性を、年齢に応じた言葉で伝え続けることができます。それは子供の心の奥底に入っていくでしょう。主に若い男性のために書かれた箴言では、1章から9章を割いて、婚外交渉がいかに愚かで、破滅をもたらすものかを若い男性に説いています。中学生になったらこのような言葉に触れるのも益と思います。

またテレビやまんが等のメディアを通して子供達の眼と耳に飛び込んでくる誤った価値観や刺激に対して、親が教会の内外と協力して真剣に取り組む事は緊急の課題です。

また次の章で取り扱うような良いデートの原則や、伴侶以外の異性と接する時のためのポリシーを持つことは非常に大切です。

IV デートの原則

次ぎは、良いデートの原則について考えてみましょう。良いデートの原則を持つとデート自体を安心して楽しめるようになります。その原則に入る前に幾つか確認したいことがあります。

A 恋する心

ある人達はボーイフレンド、ガールフレンドがないので、あせりを感じています。自分が劣って

いるような気持ちにさえなります。うらやむ気持ちは分かります。しかし、本物の幸せがそこにあるとは限りません。創世記24章のイサクとリベカを見て下さい。二人はずばらしい出会いをし、愛し愛される結婚生活を始めました。でも、二人は恋愛もしなければ、デートもしなかったのです。パウロはどうでしょう。独身でしたが、彼ほど使命と喜びに満ちて生涯を過ごした人物はいないでしょう。

逆に恋愛感情を罪として否定する人もいます。もしそうなら、罪を犯す以前のアダムがどうして恋の歌を歌ったのでしょうか（創2：23）。雅歌の解釈がどうであれ、そこで使われているのは紛れもない恋愛歌です。恋する心とは、「一体」になることへの切なる願いなのではないでしょうか。

そういうわけで、恋愛やデートというものは、よいものですが、同時になくてはならないものでもなく、また罪でもない。自由に選べることなのです。

B デート

次にこの小冊子のテーマであるデートについて考えます。この小冊子ではデートを「高校生以上の男女が一对一で交際すること」とします。

デートには色々善い面があります。何と云っても、楽しみ、喜びです。いつもはボーとしている人がデートの朝は目がきらきら輝いてきます。また自分と異性を知り、人として愛する事を学ぶ機会となります。友、親、教会の兄弟姉妹を配慮するという社会性を養う機会ともなります。もちろん、将来の結婚相手を見つける助けになるでしょう。

しかし、デートにはリスクが伴います。二人が人格的に未成熟だと傷付け合うことにもなるでしょう。別れた時の心の痛みは避けられないでしょう。婚外交渉という重い罪を犯す危険もあります。

残念ながら現代の日本には良いデートの原則というものはありません。交際する二人は、好き

な時に、好きな事を、好きなだけしているという状態です。その結果、デートの良い面が活かされず、マイナスの結果が出てきやすくなっています。心が痛むことですが、婚前交渉が一般的となりました。妊娠、墮胎が中学生から、小学生へと低年齢化しています。実は、このような悲しむべき、そして恐るべき現実の根底には、間違っただけの見方があるのです。人を、自分をどうみるのか、異性、結婚、そして性というものをどう見るのか、ということに関して、人々の考え方が出発点から間違っているのです。考え方が間違っていれば、行動も間違ってくる。聖書から正しい見方を教えられている私達クリスチャンは、主イエスが御霊によって助けて下さるので、正しい方向へ向かうことができます。

C デートの原則

1 原則は必要

何事にもある程度の原則と言うものがあります。好きなものを、好きな時に、好きなだけ食べたら体を壊すこととなります。そうしないために、一日三食、腹八分目というような「原則」を作り、自分の体を守ろうとしています。デートに関して同じ事が言えるでしょう。二人の交際が、デートの良い面を満喫し、そして、危険な面は最小限押えていくようなものになるためには、やはり、何かしらの原則、ルールが必要です。

2 一適用として

ここで、デートの原則というものは聖書には書かれていない、と言うことは覚えておきましょう。ただ、いいデートをするには、どういったやり方が役に立つのか、ということ私達は聖書を基盤に話し合い、考えていくのです。私はこれから述べる原則が今の日本で必ず役に立つものと信じて皆さんにお勧めするのですが、この原則が唯一絶対とは思っていませんし、別の国で、別の時代に通用するものとも思いません。私達はいつも聖書を基盤にして祈り、話し合い、具体的にどうしたらいいのか考えていくのであって、聖書にはっきり書かれていないことは、人を裁き、また縛る

ところの「律法」としてはならないのです。

3 人目のあるところでデートする
私が現時点でお勧めしたいデートの原則を一言で言うと「人目のあるところでデートする」ということとなります。非常に単純です。例えば：

- ・二人だけで個室に入らない。一人暮らしの異性のアパートには勿論行かない。
- ・夜の公園、人気のない海辺、夜の車の中、等を避ける。

といった事柄が含まれます。

4 理由

私がこの原則をお勧めする理由は、先ず第一に、私たちが墮落しているからです。性的な魅力、誘惑というのは、想像をはるかに越えて強烈です。クリスチャンというのは、自分が罪人であることを知っている、自分の弱さを認められるはずはです。

また、これは、歴史の中で耐えてきた原則です。米国の宣教師F師に聞いたところ、「今アメリカは性的に墮落してしまっているが、一昔前は異性と個室に入らないという健全な原則があった」と言っていました。日本国内の年配のクリスチャン婦人に、この原則を発見したが、どう思いますか、と聞いたところ、「戦前はあたりまえでした」との答えでした。

第三に、この原則は良識ある人々の間の国際的常識です。よいホテルのボーイは、シングルベッドルーム(一人用ベッドがひとつだけある、一人用の部屋)にあなたが異性と入ろうとすると、「お話はロビーでお願いします。」と言うでしょうし、それでも無理やり異性と入るならば、荷物を置いた後、ドアを広く開けて下がるでしょう。夫婦以外のカップルが密室に入ることにならないように訓練されているのです。

私が宣教師になることを考えていた頃、シンガポールへの宣教師であった横内澄江先生がちょうど帰国していましたので、滞在先のある家庭を訪ねたことがあります。私は和室の上座に通され、横内先生は廊下側に座り、後ろの障子を大きく開

けました。数年後理由をお聞きしたところ、やはり、「女性が独身で長く奉仕するために、それを原則にしている」とのことでした。一人住まいのご自分の家には、牧師先生であろうと、異性をひとりに入れることは決してない、とおっしゃっていました。

私がマニラにいた頃、家のある宣教団から借りたので、その事務所に家賃を払いに行きました。担当者は独身のアメリカ女性です。その事務所に入ると受付には何人かの人が入り、その受け付けに面する一つのドアがその女性の専用の部屋です。ドアを開けた時、部屋の中は彼女一人なので、入ってドアを閉めるべきか、開けておくべきか一瞬迷いましたが、昼間だし、宣教団の事務所で、しかもドア一枚隔てて何人かの人がいると思い、ドアを閉めました。その途端、「すみませんがドアは開けてください。」との声。「しまった」と思いました。その方は、やはり、教会の集会後、帰る方向が同じでも、異性を車にのせて送ることはしないそうです。

5 原則を守る難しさ

「一体」となることを無意識に求めている恋する二人にとって、この原則は「二人だけになりたい」という自然の感情に反するものなので、人間の力、自制心だけでは実行は難しいでしょう。「自制の実」を与えてくださるご聖霊の助けを主に祈りつつ歩みましょう。

それでも性的な誘惑が強く、我慢できないという場合はどうしたらよいでしょうか。聖書は親切的な書物ですので、その場合どうしたらよいか書いてあります。

さて、あなたがたの手紙に書いてあったことについてですが、男が女に触れないのはよいことです。しかし、不品行を避けるため、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ、自分の夫を持ちなさい。(I コリント 7 章 1、2 節)

どうしても我慢ができなければ、不品行という重い罪を犯すよりは結婚した方がよい、というわけですが(もちろん結婚にはもっと積極的意味があり

ますが)。

D その他

さて、その他、デート中に心に留めると役立つことを幾つか申し上げたいと思います。

1 人格的交わりを深めることを目標にする

肉体的な接触は結婚したらいくらでもできます(もちろん伴侶への配慮の故に、結婚後も自制することが多い事は覚えておいて下さい)。デートの時は、人格的な交わりを深めることを目標にしましょう。共に語り、共に考え、共に祈るのです。喫茶店で話すだけではつまらないし、相手を十分に知ることでできません。映画が好きなら、映画を見て語り合う。絵が好きなら絵を見て感じたことを分かち合う。音楽が好きなら、コンサートに行く。スポーツをする。そうする中で、相手を知れるし、自分のことも知ってもらえるのです。また異性を知り、大切にしておくことも学んで行けます。

2 周りの人への配慮を学んでいく良い機会とする

親と住んでいる限り、家族という共同体の一員です。他のメンバーへの愛の配慮をすることは成熟さのしるしでしょう。特に親に余計な心配をかけさせないことは大切です。デートの相手、行き先、帰宅時間を告げましょう。また、つき合っている人を自宅に連れてきて親に会わせてみませんか? あなたの親に絶対会いたくないと言ったら、それは、下心があるか、成熟してないかのどちらかかも知れません! ここでもまた相手を知る事になります。もし親が驚いたり、また自分自身がまだ結婚を考えてなかったら、考えていないと親にあらかじめ言えばよいのです。

また私たちはキリストの体の一部分です。牧師先生ご夫妻か、信頼できるクリスチャンカップルに祈ってもらうことは、大切です。つき合っている人と一緒にそのご家庭に押しかけましょう(もちろん、あらかじめお願いしてからですが)。つき合っている人が自分以外の人と話しているの

を見ていると、今まで気がつかなかったその人の一面を知る事になります。信頼するそのクリスチャンカップルから良い助言もいただけるでしょう。クリスチャン夫婦、クリスチャンホームの良い（完全でなくても）モデルに触れることにもなります。何よりも祈って頂けます。その方々が忙しそうに見えても遠慮しすぎはいけません。若いクリスチャンと交わりまた助けになることは、その方々にとっても喜びなのですから。

3 別離の可能性あることを考え、 相手を大切にす

結婚式の直前まで、つき合っている人はあくまでもあなたのものではありません。今の相手は、将来他人の妻や夫になる可能性があります。別の家庭のお母さん、お父さんになる可能性があるのです。婚約は結婚と同等ではありません。私は今のあなたの愛を疑って言うのではなく、また婚約を軽く見ているのでもありません。ここで言いたいのは、将来別の人の伴侶になる可能性がある人と、肉体的接触を深めてはならないということです。もし本当の愛があるなら、相手とその将来をも大切にすべきです。

V 結婚に向けて

デートが進む中で、結婚の事で色々考えることがあるでしょう。いくつかよくなされる質問に、私なりに答えてみたいと思います。ただ以下の内容は教会によりまた先生方により指導上の違いが多少あるでしょうから、参考程度にして下さい。

A 伴侶選択の基準

よく「どんな伴侶を選んだらよいですか」と聞かれます。ある時出席した結婚のセミナーで講師の先生が 3M と言っていました。Master, Mate, Misson です。第一はマスター、主を同じくする人です。未信者との結婚は私は個人的には勧めにくいです。最大の理由は、人生の危機の時、夫婦の判断が別れ、つらい状態になると思うからです。しかし、勿論例外もあります。このことは、十分に語る紙面がここではありません。第二はメイト、

すなわち、自分にとって、異性として魅力を感じる人を選ぶのが基本です。もちろん自分の理想の異性像が本当に良いメイトとは限りませんが、それでも、一緒にいて落ちつく、何かしらの魅力を感じるというのは、大切な面です。第三はミッション、すなわち、クリスチャンとして似たような重荷や使命感を持っている人です。同じクリスチャンでも、人生の方向性、仕事、奉仕、家庭の在り方、等の考え方があんまりずれていたら難しいでしょう。

B 「み心の人」について

「『み心の人』が世界にただ一人いて、その人と結婚できなかつたら不幸になる。その『み心の人』を知るには『み言葉が与えられ』なければならない。」と知っている人がいます。私は、個人的にこの意見には、注意が必要だと思っています。その理由は、

- この考え方の背後に運命論的な神観を感じてしまうからです。私達が信じる神様は「お父さん」と呼べる人格的な神様です。天のお父さんと交わりながら歩むのがクリスチャンで、何か運命的に決まったコースをただ走っているではありません。天の父は、生きておられ、私達にとって最善をなして下さいます。その方に信頼し、安心して生きて良いのです。

- またこの考え方は、人間をロボットのように見ているような気がします。神の像に造られた私達だけが、主の助けを祈りつつ判断し、決断することが主に求められています。例えば、眼鏡のフレームはみ心のものが唯一世界のどこかにあって、それを知るにはみ言葉による、とは思わないでしょう。もちろん、眼鏡と伴侶選びは全く違うレベルの事を語っていますが、選び、決断する自由が神様から与えられているのです。もちろん、その判断、決断のプロセスで、ご聖霊が導き助けて下さいますが。

- 「み心」は明確に聖書に書かれてあります。ある女性が、既婚の男性との結婚を「御心と示されました。」しかし、それは間違っています。なぜ

なら、聖書の十戒に反するからです。

・ある美しいクリスチャン女性に7人の男性がみ言葉を与えられ、御心と信じてプロポーズしたことがあったそうです。それは、本当に御心でしょうか。

そう言うわけで、「どうやったら唯一の御心の人と分かるか」という問いよりも、「この人こそ、私の伴侶」と、確信を持って決断するにはどうしたらよいか、と聞く方が健全のような気がします。その答えは単純です。人それぞれ多様なプロセスを通っている、ということです。幸せなクリスチャンホームを築いているカップルに、どの様に決断したかと、聞いてみました。返ってくる答えは様々でした。「好きだったから」「先生の紹介だったから」「み言葉が与えられたから」「写真を見て」等々。一つのパターンは存在しないのです。大切なのは結婚してからの歩みです。

最終的に選択・決断するのは自分です。しかし、私達はキリストの体の一部であることをいつも覚えておきましょう。牧師先生夫妻や、教会の信頼できるカップルに相談し祈ってもらいましょう。独りよがりの偏った判断なら、指摘して下さるでしょう。

以上の事をまとめてみましょう。究極の人を得るために、神とみ言葉を利用するのではなく、また、マニュアル的なパターンを探すのでもない。天のお父さんとの日々の交わりの中で、「父」を信頼して行く。教会の交わりの中で、祈ってもらおう。自分にふさわしい伴侶に導かれるよう、若しくは判断、決断が出来るよう、祈りつつ歩むことが大切なのです。

C 婚約中の交際における注意

さて、皆さんが婚約したとします。婚約というのは大切な約束ですが、結婚とはレベルが違います。結婚という契約は余程の事がないと解消できません。しかし、婚約は違います。色々な事情で、結婚の約束が残念ながら取り消しになることがあるのです。この点は重要です。婚約中のカップルは、半分結婚したような気持ちになり、過ちを

犯す危険性が高いのです。婚約中こそ、今まで学んだデートの原則を真剣に守っていききたいものです。

VI その他

デートに関する小冊子ですが、デート以外の事にも触れてみましょう。

A 過去の傷のいやし

私達は過去の人間関係の影響を強く受けています。自分の両親の夫婦関係、また自分と両親との親子関係が、今の自分の異性観、結婚観を形作っているからです。この小冊子では、この深く大きな問題に触れてはいません。しかし、私たちの生育暦は、実は想像以上に今の私たちに影響を与えています。夫婦関係が旨く行かない原因の多くは、過去を引きずっているからです。しかし、天の父なる神様の愛のうちに過去と向かい合い、時間がかかりますが、少しづついやしや回復に向かっていけます。今色々良い本が出ていますので参考にしたり、専門家の助けを受けることをお勧めします。

B オナニーについて

若いクリスチャンの間でオナニーは大きな問題です。罪だと言う人もあり、そうでないと言う人もいます。オナニーという言葉は、創世記38章4-10節のオナンの物語から来ています。ここでは、律法に従わず、兄弟の家系に子孫を残そうとしなかった罪が問われていて、オナニーとは関係ありません。聖書はオナニーに関して沈黙しています。沈黙している事柄に関して私達は色々論議する自由があると思いますが、聖書が沈黙している事実は重要です。ローマ14章5節にあるように、どちらの考え方にせよ、互いに裁かず、それぞれ自分の心の中で確信を持つべきでしょう。

C 墮胎に関して

人間は出産の瞬間に人間になるわけではありません。体内にいる時から、神の像に造られた人間なのです。墮胎は殺人の罪以外の何ものでもありません。

せん。子供の命を守るべきである親や医者が、全く無力な人を殺すという意味で、より罪が深いのではないのでしょうか。残念ながら、福音派クリスチャンの中にも婚前交渉をし、妊娠してしまう女性が増え、「小さな命を守る会」にも相談の電話が来るそうです。ところが、クリスチャンの方がかえって墮胎してしまうケースが多いと言います。驚くべきことです。教会の人に後ろ指されるのに耐えられないからだそうです。基本的にはその人が、神より人を恐れている、という本人の信仰の質の問題でしょう。しかし、それだけではないと思います。教会の側の反省も必要です。もし悔い改めたならその人を裁かず、受け入れ、しかも具体的に助ける、という姿勢がクリスチャン全体にあるかどうかいつも問われると思います。罪を憎んで人を憎まず、という古い句は今でも生きています。望まない妊娠をしたら、教会や「小さな命を守る会」に相談してみましよう。守る会は、墮胎を防止する様々な教材も提供しています。²

VII 最後に

今まで聖書を基盤に、人間、異性、結婚、性、そしてデートの原則について学び、考えてきました。聖書には、創造本来の男女のあり方（創造の秩序）が書いてあります。そのあり方からはずれることを聖書では罪と言っています。またそのあり方からはずれることが不幸の原因なのです。イエス・キリストは、その罪をゆるすために来て下さいました。いや赦しだけではありません。創造本来の男女のあり方（創造の秩序）に私たちを回復するために来て下さったのです。デート、結婚、性、結婚生活の全ての分野でイエス様に頼っていきましょう。そこには解決への希望があります。

² 101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-1 OSCC 5F
Tel & Fax: 03-3233-4988

創造の回復シリーズ

神の造られた世界は秩序あるよいものでしたが、墮落の故に歪んでしまいました。しかし、神はキリストによって全被造世界を創造本来のあり方に回復し、また完成させようとされています。この小冊子シリーズは、創造秩序の回復と完成というキリスト教独自の視点で書かれています。

No.1 終末の今を生きる：千年王国説の違いを超えて

私達の救いは、仏教やギリシャ思想のように魂が天に行くことで終わるものではありません。実は、キリストがもう一度地上に来て、私達を新しい地上によみがえらせ、全世界を変えて永遠に治めて下さることこそが救いの完成なのです。このキリスト教終末論は、聖書、古代教会の理解、また福音派の学者によって支持されているだけでなく、生活の現場での私達の日々の労苦が無駄でない、と語ります。(B5版、15ページ)

No.2 神国論に見る新プラトン主義的霊性

救いが天上で完成するというのは、二元論的なギリシャの異教思想です。この異教思想は5世紀前後に西方教会(ローマ教会)に入って来たようで、アウグスティヌスの神国論にもその軌跡が見いだされ、それは、宗教改革者にも影響を与えています。(B5版、6ページ)

No.3 内村鑑三の終末観：世界観的回心の体験

西方教会に入って行ったギリシャの異教思想は、プロテスタントに引き継がれ、内村鑑三も二元論的な救済観を持っていました。しかし、内村は、1918年にそれまでの救済観から脱却し、古代教会が持っていたような聖書的な救済観・終末観に開眼し、生き方が変化して行きます。(B5版、3ページ)

No.4 デートの原則、結婚、性

婚前交渉と墮胎をする若者の年齢は益々低年齢化しています。その背後には、自分と異性また、性と結婚に対する間違った考え方があります。この小冊子は聖書が語る人間観、性、結婚観を出発点として、デートの原則を探ります。高校生以上の方々、中高生科のスタッフ、またご両親方にお勧めします。(B5版、13ページ)

著者紹介

島先克臣(しまさき かつおみ) 1954年埼玉県久喜市生まれ。二十歳の時入信。立教大学英米文学科、聖書宣教会、米国ゴードン・コンウェル神学校旧約修士、英国チェルトナム・グロスター大学旧約博士過程(ヘブル言語語学)終了。牧師(日本1981-87)、宣教師(フィリピン1988-93, 2000-04)。3児の父。

デートの原則、結婚、性

2001年6月1日 発行 第二版

著者 島先克臣

発行者 島先克臣

〒346-0002 埼玉県久喜市野久喜 835-6